



# 教皇様の敵

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticanoの転載許可済  
© 1996 発行所  
財団法人 精道教育促進協会  
〒659 兵庫県芦屋市船戸町12-6  
TEL 0797-31-3452・FAX 0797-31-3448

## 四旬節★三重の改心への招き

★「悔い改めて福音を信じよ。」(マルコ1・15)

灰の水曜日、典礼がキリスト信者呼びかけるこの招きは、私たちが四旬節という内的な改心と痛悔、愛徳の道程に導きます。

この日には灰を額につけ、人間としての私たちの運命が地上で終わるのではないこと、私たちが地上の旅人であること、生命は神からのすばらしい贈り物として生まれ、守られ、尊重されるべきであり、永遠へと向かう巡礼の旅路で次第に成長し、ついに神にまみえること、などを思い起こします。「私たちはここに不変の都を持たず、未来の都を探している。」(ヘブライ13・14)この手紙の著者は、

続いて勧告します。「全ての障害物と包まれている罪を除き、忍耐をもって、私たちに差し出された競争を競い、信仰の創始者であり完成者であるイエズスに目を注ぐようにしよう。」(12・1・2)

四旬節は信仰の教育と形成の上でまたとない機会です。教会は、私たちの精神と心を生ける神の秘義に向けよ、神は正義と憐れみをもってご自身を表わされた、と呼びかけます。地上の生活のはかなさを思い、罪や無関心を克服しましょう。日常生活のまどろみから覚め、私たちに希望をかなえてくれる目的地へと旅立ちましょう。「あなたはちりであって、ちりに返る」という言葉には、次の勧めが統

じます。「悔い改めて、福音を信じよ。」

★「悔い改めよ! これは、四旬節のたびにさらなる熱意をもって取り組むべき課題です。悔い改めよ、まず第一に、世の光イエズス・キリストの真理に。神はその御独り子において、明確な形で自分を人間にお示しになりました。御子は託身したみことば・人類を贖い、その元々の尊厳を取り返すため、死んで復活した御方です。贖われた人々の共同体である教会を通して、キリストは救いの計画を世々の人々の間に広げておられます。紀元二千年を迎えようとする現在の私たちのためにも、主はその計画を成し遂げようと考えておられるので

す。回勅「贖い主の使命」で述べたように、「神の国とは、自由に表現しようような概念とか教義とかプログラムとかではなく、まず第一にナザレトのイエズスの顔と名前を持った一人のペルソナ(位格)、目に見えない神のうつつである御方です。御国を教会から切り離すことはできません。もちろん、教会は自己目的ではなく、神の国のために定められています。教会はこの御国の種であり、しるしであり、道具です。しかし、教会はキリストと御国から区別されているにしても、両方に、解き放すことのできない方法で一致しています。」(18番)

四旬節が黙想と霊的な刷新の機会となりますように。啓示された真理を深く究め、全人類と私たち一人ひとりのための愛に満ちた神のご計画を再発見する時となりますように。

★求められている第二の改心は、聖性を目指す改心です。実際、神は私たちの聖化をお望みです。聖パウロはテサロニケ人に書き送っています。「平和の神御自らあなたたちを聖としたもうように。あなたたちの霊と魂と体のすべてが主イエズス・キリスト来臨の時とが

なく守られるように。」(Iテ

サロニケ5・23)霊的完成を目指し、生涯を捧げねばなりません。四旬節にはさらに一層、無関心でよそよそしい状態を脱し、確信をもって宗教を実践し、凡庸さや生温さから熱意とまごころへ、恐る恐る信仰を表わす状態から率直で勇敢な信仰の証人へと変わるよう、招かれているのです。

四旬節は、神の御旨と憐れみを理解し、愛を込めて受け入れるための絶好の機会です。そこでこの時期の典礼は、改心と赦しについて強調しているのです。「神はキリストによって、私たちをご自分と和睦させた」と使徒は言います。「神が私たちを通して勧められるのであるから、私たちはキリストの使者である。キリストによって切に願う、神と和睦してとどまれ。」(IIコリント5・18、20)

★ここから、四旬節が促す第三の改心が現われます。皆さん、誰にもこの緊急の呼びかけを無視することはできません。今日、人類が経験している悲劇的な出来事を考えてみてください。神との和解は、心の平和、内的な喜び、他者との兄弟的理解を取り戻すために必要な条件として全ての人に求められています。それは家庭と社

# 説教・講話・書簡等の抄記

会、ひいては世界の平和につながるものですか。

神は赦しを通じてご自分の生命を啓示されます。自らの生活の中に、人類の贖い主であり、全ての人の救いのために十字架上で死去されたイエズス・キリストを受け入れる人なら誰にでも、神の生命が与えられます。



各地で紛争が続く、不安と動揺に満ちた現代、四旬節は心を落ち着けて世界平和を願う機会となります。歴史を振り返れば「理性の力」が必ずしも衝突を避け、紛争を解決するには至らなかったことがわかります。善意や、一部の人々の努力も、時には悪の力が強すぎて対抗する手段がないと思われため、十分な効果を發揮することができません。ただ神のみが、人々の心を動かして敵意を取り去ることがおできになります。神のみが人々の思いを、まことの善を知ることや、もつと正義にかなない、兄弟愛に満ちた世界を築くのに必要な選択へと向けさせてください。四旬節の典礼は「神の御声を聞け」と繰り返し勧めます。全力を上げて、悪の根源である利己心と戦うようせき立て、平和と協調を私たちのうちに、周囲に広げるよう促しています。歴史の中心となる過越の秘義

を見つめつつ、教会は私たちを招いてやみません。絶えざる祈りと痛悔、兄弟姉妹、特に最も貧しい人々への謙遜で生き生きとした奉仕を通して、和解と平和の賜を求め続けよ、と。その意味で、四旬節は愛徳を学ぶ期間、自己を自由に他者に与え、全ての人、とりわけ社会の隅に置かれた人々との兄弟的なきずなを深める時なのです。



親愛なる皆さん、歴史の中で最も困難な時にも、いつもキリスト信者の側におられる聖母マリアに学び、みことばである神の従順な生徒になりましょう。私たちを新たな存在としてくれる愛の力を、力強く証しする者となれるでしょう。復活祭に備えるこの日々を霊的な面で努力を傾ける時とするよう、全ての信者に勧めます。私たちを取り巻く劇的な状況は、良心への挑戦であり、望みをかき立てます。

平和を得るには、祈りと痛悔、内的な改心と惜しみない連帯が不可欠です。それはまた、実際の和解と、可能な限りの手段を講じて戦争によって失われつつある人命を救う努力にも表われるべきです。こうして四旬節のあらゆるわざは、平和を求めめる謙遜で熱烈な祈りに変わるのです。(九一・二・十三)

聖母に呼びかけるお告げの祈りの時間に当たり、ロザリオの悲しみの玄義・第五玄義を黙想してみよう。「イエズス、十字架にて息絶えなれ。」イエズスの受難と死は、救いの歴史の上に起こった他の重要な出来事と同じく、天と地との両方にまたがる出来事でした。創造しかり、イエズスの誕生しかり、復活しかり、主の再臨しかりです。ルカによると、「昼の十二時ごろ、太陽は光を失い、三時ごろまで地上二帯が暗くなった。」(23・44)

この出来事は、イエズスが「逆らいのしるし」(ルカ2・34)であったことを如実に物語っています。実際、人々はイエズスを認め、崇めるか、それともあざけるか、どちらかに別れることになったのです。ルカは、祈るイエズスの姿を描いています。「父よ、彼らをおゆるしく下さい。何をしておられるか知らないからです。」(23・34)これは殉教者の最高の模範であり、愛の教えの極みです。苦しみのさ中で、イエズスは自分を苦しめる者たちのために弁護をし、善をもつて悪に報いたのです。キリスト教最初の殉教者ステファノは、イエズスと寸分変わらぬ祈りを繰り返すことになりました。

十字架のもとに立ち会った人々の対照的な姿は、福音記者の筆で克明に書き留められています。「かしらたち」と「兵卒たち」(ルカ23・32、39)は期待を裏切られたかと思われ、嘲弄していますが、人々はその間に立って見えています。(23・35)二人の悪人も、それぞれ全く異なった対応を見せます。(23・32、39)一人はイエズスに悪口を浴びせしますが、もう一人は驚くべき和

「この方は  
本当に  
神の子だった。」

◆キリストのご死去を  
前にして

解の証人となりました。自分の行なった悪事の報いを受けるのは当然であると認めていた彼は、同じ刑罰を受けていた仲間とは根本的に違いました。「だがこの人は何の悪事もしなかった。」(23・41)そしてイエズスの憐れみの前に自らを投げ出したのです。(23・42参照)

聖ヨハネは十字架のもとにたずむマリアの姿を描いています。それは愛のために身を捧げ

た苦しみの婦人、与え、受け入れる婦人、イエズスの母、教会の母、全人類の母です。十字架の近くには他の婦人たちもいましたが、「母と愛する弟子がそばに立っているのを見られ」(ヨハネ19・26)たイエズスは、非常に深い霊的含みを持った言葉を口にしました。「婦人よ、これがあなたの子だ。」「これがあなたの母だ。」(19・26、27)ヨハネの内に、全ての人が、神の御子を世にお与えになった御方の子である自分を見出し出すことでしょう。

死の前にした時もイエズスは祈り続け、全ての人を救うための決定的ないけにえとして御父に自らを捧げることが宣言したのです。「父よ、私の霊を御手にゆだねます。」(23・46)私たちが救いのために死なれたキリストの秘義の前に、私たちも言わざるを得ません。「確かにこの方は神の子だった。」(マルコ15・39)

聖週間に向けて真剣に信仰の歩みを続ける私たちがマリアが助けてくださいますよう。沈黙のうちに祈り、日々の生活と具体的な歴史の出来事を全て、兄弟姉妹たちと分かち合う愛と希望の贈り物とすることができま

「子供と秘跡」……子供との関係において洗礼・聖体・赦しの秘跡について考察します。ライト枢機卿著 定価七七三円  
「子供の性教育」……信仰や超自然的な意味を中心に性教育を考える一冊。ホルダン著 定価八〇〇円

# 人間の神秘に光をあてる

## 「現代世界憲章」

### 〈第二バチカン公会議を振り返る・その3〉

(三) 今回は第二バチカン公会議文書「現代世界憲章」を振り返ってみたいと思います。この文書は、現代世界における教会の使命を示したものです。その冒頭の部分に耳を傾けてみましょう。「現代人の喜びと希望、悲しみと苦しみ、特に貧しい人々とすべて苦しんでいる人々のものは、キリストの弟子たちの喜びと希望、悲しみと苦しみに苦しみでもある。真に人間的な事柄で、キリストの弟子たちの心に反響を呼び起こさないものは一つもない。」(一番) 今日もお、感銘を与える一節です。教会は当時と変わらぬ確信と意向と希望をもって憲章の言葉を確認します。

人間についての秘義は、現代世界憲章が考察の焦点とするところです。(10番参照) ここでは具体的な歴史状況のもとにある人間が考察されていますが、同時に人間本性の不変の特徴という面からも理解されています。弱さは人間につきものです。それでも比類のない尊厳が授けられています。人間は「神の似姿」であり、神が「そのもの自体のために望んだ地上における唯一の被造物」(24番)だからです。人間は歴史を作ると同時に、永遠を目指すよう召されています。公会議文書は神を人間に、そして人間を人間自身に啓示したキリストと人間との深い類似点について述べています。「実際、受肉したみことばの秘義においてでなければ、人間の秘義は本当に明らかにはならない。」(22番) 現代世界憲章の後半部分は、現代世界のさうらに差し迫った問題に言及しています。結婚と家庭、文化、社会と経済、政治、民族間の平和と連帯を進めること、など。文書はこれらの点について具体的

に鋭く、要求を突き付けています。いま読み返してみれば、あの当時から世界に起こった数々の出来事を経て紀元二千年を目前とする今日も、現代世界憲章がいかに預言的で時宜を得たものであったかを悟らずにはいられません。

## 信徒は教会の救いの使命をになう

### 教へバシリーズ 32

1 キリストの御国を広げる仕事に信徒も携わっていますが、それはどの時代を見ても事実です。使徒の頃の集會に始まり、初期キリスト教徒の共同体から中世のさまざまなグループが織りなす運動や組合、兄弟団、協会を経て近代の個人や団体による活動、そして私たちが生きる現代に至るまで、信徒は教会の牧者たちを支え、家庭の中で、社会で、その時代の社会状況に応じて、時には血を流すほどの犠牲を払いながら、信仰と道徳を守ってきました。十九世紀と二十世紀には聖人たちが始め、司教の支持を得たいくつもの運動があります。それらを見れば信徒の使命について理解を深めるのみならず、

兄弟姉妹の皆さん。私たちが公会議の示す「王道」を忠実に歩むことができるよう祝された処女の助けをお願いしましょう。聖母マリアが現代人の心を照らし、人類が自らの超越的な基盤を見失うことがないように、その奪うことのできない尊厳を

ず、この使命が真の「使徒職」であることを疑問の余地なく明確に悟ることが出来ます。ピオ十一世は「カトリック・アクション」に関連して、「位階制の使徒職への信徒の協力」について述べています。それは教会にとって決定的な時期でした。二つの方面で注目すべき発展がありました。一つは特にカトリック・アクションが体現した組織化の面、もう一つは理論的・教理的な考察で、「教会の救いの事業に参加する」(教会憲章33番)ことが信徒の使徒職であると述べた第二バチカン公会議の教えの中にその精髓が見られます。

無視することのないよう導いてくださいますように。教会が時のしるしを見失わず、人々への奉仕に努め、福音を効果的に証しし、神のみ旨にそった世界を建設する助けとなるため、その歩みを導いてくださいますように。(九五・十・二九)

2 公会議は、聖霊降臨に始まりした教理として明文化したと言えらるでしょう。あの時、聖霊を注がれた人は皆、福音を宣言し、教会を立てて発展させる使命を授かったことを感じました。その後の数世紀の間に秘跡神学が明らかにしたのは、洗礼を受けて教会の一員となった人は誰もが聖霊の助けのもとに信仰の証人となり、キリストの御国を広げる義務を負っているということです。この義務は堅信の秘跡によってさらに強められます。公会議によれば、信者は堅信によって「キリストの真の証人として、言葉と行ないをもって信仰を広めるよう、いっそう強く義務づけられる」(教会憲章11番)のです。さらに最近になると、教論の進展と共に信徒の参加という考え方がさらに発展します。キリスト教入信の二つの秘跡のみならず、聖霊降臨の精神ののつとった教会

信徒の使徒職は洗礼から

# 不変の教え

の秘義へのさらに意識的な参加が前面に出てきました。これは信徒に関する神学の、もう一つの基本点です。

### 3

「キリスト者としての召命そのものから生まれる信徒使徒職は、教会に決して欠くことのできないものである」(信徒使徒職に関する教令1番)という神学上の原則は、意を尽くした明快な言葉で現代における信徒の参加の必要性を訴えています。この必要性は、現代の特徴的な状況の中でさらに強調されます。たとえば都市の人口が増えて司祭の数が不足がちであること、仕事や学業、レクリエーションなどに由来する流動性などがそうです。社会の各方面での自律性が倫理的・宗教的な状況を困難なものにしたため、内側から行動を起こす必要が高まっています。司祭は社会の多くの分野の仕事や文化に入り込むことができません。こうした理由で、新たな福音宣教の仕事が信徒に求められているのです。一方、各種の組織や民主的な考え方が発達してきたおかげで信徒自身も教会への参加の必要性を敏感に感じ取るようになっていきます。文化が普及し、その水準も上がったことで、多くの人が社会と教会のために働く能力を身につけています。

### 4

さて、歴史的観点から見れば、信徒の活動が新たな形を取っていても驚くには当たりません。現代の社会や文化の状況から来る影響のもとで、以前には背景に置きざりにされていた親のある教会論の原則に強い関心が集まっています。教会における奉仕職の多様さは、神秘体に不可欠のもので、神秘体が発展するためにはそのメンバー全員が必要であり、各自がさまざまな能力に応じて寄与しなければなりません。「それぞれの肢体の働きに従い：身体全体は成長をとげ、愛によって自分をつくり上げる。」(エフェゾ4・16) かしらであるキリスト(同)によって自らをつくり上げるのですが、それには各メンバーの協力が求められます。教会の中には種々の役割があるが、使命は一つ(信徒使徒職に関する教令2番参照)だからです。多様性は一致を妨げず、かえって富ませているのです。

### 5

司祭に関するカテケーシスでお話ししたように、叙階された人の奉仕職と、叙階によらない奉仕職との間には本質的な違いがあります。公会議の教えによれば、信者の共通司祭職と、職位的または位階的司祭職とは、段階においてだけでなく本質において異なる(教会

憲章10番)ものです。使徒的勸告「信徒の召命と使命」は、叙階による奉仕職は叙階の秘跡によって行使されるものであって、叙階によらない奉仕職すな

わち信徒による任務や役割は「洗礼と堅信、そのうえ大部分の者にとっては婚姻の秘跡のうち」にその土台を持つ(23番)と述べています。この最後の部分は特に夫婦と両親にとつたいへん重要で、この人々はまず家庭の中でキリスト者としての使徒職を果たすよう召されている(カトリック教会のカテキズム20番)からです。

使徒的勸告「信徒の召命と使命」は指摘しています。「司牧者は：信徒の奉仕職と任務と役割を認め、育てなければなりません。」(23番) 霊魂を牧するべき司牧者に、任された共同体の仕事をもかも期待するのは無理な話です。司牧者は信徒の能力や有能さに信頼し、その活動を最大限に活用すべきです。しかし、信徒が司牧者に代わって、叙階の秘跡による力を必要とする奉仕職を執行することはできません。また、司牧者も信徒が能力を発揮できる固有の分野に、信徒にかわって立ち入るべきことはできません。司牧者がなすべきことは、信徒の役割を後押しし、教会の使命への参加を

### 6

促すことです。教会法典の定めをも銘記しておきましょう。「教会に必要と認められる場合」信徒も聖職者の仕事の一部を分担することがあります(教会法第30条第3項)が、先の使徒的勸告にあったように「このような任務を果たすことによって、信徒が司牧者になるわけではありません。」信徒による肩代わりは、「教会の指導者の指導のもとに具体的に果たされる場合に、公の代理委任によっても、正式に合法化されます。」(「信徒の召命と使命」23番)

キリストの預言職に加わる

信徒の活動は「非常事態や慢性的な窮状」に限り要請されるわけではありません。教会生活には、位階制に適した仕事と共に、信徒の活発な参入を必要とする分野も存在します。一つは典礼集会です。聖体祭儀を行なうには、叙階の秘跡を受けてキリストの御名によるいけにえを捧げる力を授かった者、すなわち司祭が必要ですが、「信徒の召命と使命」によれば典礼集会は「会衆全員の聖なる行為であり、教役者(クレリクス)だけのものではなく」(23番) 共同体の行なう行為です。「従って、

叙階を受けた奉仕者本来の仕事でないものを、信徒が果たすのは全く自然なことです。」(同) 何と多くの信徒たちが、大人も子供も、若いも若きも、あるいは折り、あるいは朗読や歌、その他さまざまな教会堂内外での奉仕によって、教会の仕事のみごとくに果たしていることでしょう。現代のこのような事実に対し、主に感謝を捧げましょう。主の助けによって教会を助ける信徒がどんどん増えつつよう、折らねばなりません。

### 7

同時に、信徒は神の言葉を告げる義務を帯びています。信徒にもキリストの預言職という任務があり、福音宣教を行なう責任があるからです。そのため信徒は特定の役目や、時には恒久的な委任をも受けることができます。カテケーシス、教育、マスメディアやカトリック関係の印刷物の出版・編集、その他教会が信仰を広めるために進めている種々の仕事があります。(教会法906番)

いずれの場合も教会の使命に加わり、新たな聖霊降臨を実現させることでなければなりません。その目的は、エルサレムのあの高間に降った聖霊の恩寵を全世界にもたらし、神の不思議なわざを諸国民の前に示すことなのです。(九四・三・二)

「教皇様の声」ヨハネ・パウロ二世教皇の説教 書簡、講義等を解説なしにそのまま伝える月刊紙 毎月十日発行 定価 一部百八十円(送料とも) 二年予約 送料とも一〇五〇円から。詳しくは精進教育促進協会まで。

郵便振替 01130-8-72393

# 説教・講話・書簡等の抄訳

教皇様の声・3月号付録

## ◆「聖母マリアと教会」についてのお話・シリーズ(2)

# おとめマリアは神の御母

### 1 公会議文書「教会憲章」

にはこんな一節があります。「信者はかしらであるキリストに一致し、キリストの全ての聖徒と交わりながら、まず神でありわれわれのへ主イエズス・キリストの母、光栄ある終生おとめマリアを思い起こし敬わなければならない。」(52番)この教会憲章はローマ典文(第一奉献文)の言葉を用いて、神の御母マリアへの信仰が初代教会の頃からキリスト信者の間に根強かったことを強調しています。

生まれたばかりの教会の中では、マリアは「イエズスの母」として記憶されていました。これはルカが使徒行録の中でマリアを呼ぶのに使った言い方ですが、この呼び名はむしろ福音書の語る内容の方と一致しているように思われます。「あれは：マリアの子ではないのか？」とナザレトの人々はいぶかしんだと、マルコは伝えています。(6・3)「母はマリアと呼ばれているではないか？」と怪しまれた、とはマテオの記すところですが。

### 2 マリアの母性は教会にも及ぶ

ご昇天の後、集まった弟子たちにとって「イエズスの母」という呼び名はより完全な意味を持つに至りました。彼らにとってマリアは本質的にかけがえない存在でした。マリアは人類の救い主をこの世にもたらすという比類のない恩寵にあずかり、長年にわたって救い主のかたわらで過ごし、カルワリオにおいては十字架の上から使命を受けて、愛する弟子と、またその弟子を通じ全教会に対して「新たな母性」を行使することになりました。

イエズスを信じ、つき従う者にとって「イエズスの母」は名誉と崇敬の称号です。教会の信仰と生活の中でも永久にそうあり続けてきました。特にこの称号を耳にする時、イエズスの出自は、聖霊の力によって人間性という面でイエズスを世に送り出す役割を果たした一女性を抜きにしては考えられないことを示します。母親としてのマリアの役目は、教会の誕生と発展に関わっています。イエズスの

### 3 教会は最初の頃から、マリアが処女であり母であることを認めていました。

生涯においてマリアの占めていた位置を思えば、キリスト信者は日々の霊の旅路の途上でマリアの存在の大きさを実感できることでしょう。

教会は最初の頃から、マリアが処女であり母であることを認めていました。福音書にあるイエズスの幼年時代の記述の内容からもわかるように、初期の教会共同体では救い主の懐胎と誕生をめぐる神秘的な状況について、マリアの回想を集めてきました。とりわけお告げについての話は、復活したキリストの地上での生活の始まりに関する出来事だけに、弟子たちが最も知りたいと願った事柄でした。要するに、聖霊の働きで処女が身ごもるといふ秘義の啓示は、マリアから始まっているのです。

イエズスの神的出自を示すこの真理は信仰のかなめであり、重大な意味を持つものでしたから、初代教会の信者たちはすぐに理解しました。法律上ヨセフの息子であったイエズスは聖霊の特別な介入によって、人間としてはマリアだけの子でした。

男性の介入なしに生まれたからです。

こうしてマリアの処女性性は比類のない価値を持ち、イエズスの誕生とマリアの子であるという秘義に光を投じています。処女から生まれたことは、イエズスが神ご自身を父とすることのしるしだからです。

教父たちが承認し、宣言した聖母の処女性性は、真の神・真の人であり、ニケア・コンスタンチノーブル信経にあるように「処女マリアから生まれ」たイエズスその人から切り離すことはできません。マリアは処女のまま母となった唯一の人です。驚くべきことに、ナザレトの一人の処女の中でこの二つの賜が共存しています。そこでキリスト信者は、マリアの母性を祝する時でも単に「処女」と呼べば事足りるわけです。

マリアの処女性に端を発して、キリスト教共同体では主から純潔の生活に召された全ての人々の処女的生活が広まるようになりまし。キリストの模範を理想と仰ぐこの特別な召し出しは、いつの時代も教会の測り知れない霊的豊かさを表わしています。教会にとってマリアは靈感の源であり、模範です。

「神の御母」は民衆信心の表れ

### 4 「イエズスは処女マリアから生まれた」：これによって、イエズスの誕生は超越的な秘義を帯びました。

この宣言は、神の子としてのイエズスという真理においてのみ、完成を見るものです。マリアが神の御母であるという真理は、キリスト教信仰の中核と密接に結び付いています。すなわち、マリアは「神よりの神、まことの神よりのまことの神」、人となられたみことばの御母である、という事です。

「神の母」という称号は、すでにマテオが「エンマヌエル(神はわれわれと共にまします)の母」(1・23参照)という言い方を使って証言していましたが、明らかにマリアに対して用いられるようになるまでに二世紀に及ぶ考察が必要でした。エジプトのキリスト教徒たちがマリアをテオトコス(神の母)と呼んで祈り始めたのは三世紀のことでした。

世界中のキリスト信者たちの祈りの中で繰り返し呼ばれるこの名のもとに、マリアの母性の本当の意味が示されています。マリアは神の御子の母であり、処女のまま、御子に人間本性を与えて生み、母の愛をもって育て、こうして人類の運命を変えらるため世に來られた神なる御方

# 説教・講話・書簡等の抄訳

教皇様の声・3月号付録

## 5

マリアへの最古の祈りの言葉(スプ トゥウム プレシデイウム)「神の聖母のご保護によりすがりたてまつる

」は、テオトールコス「神の母」という称号を備えています。この称号は神学者たちが考え出したものではなく、キリスト信者の信仰が直観的に導きだしたものです。イエズスを神と認める人なら、マリアを神の母と呼んで、人生の試練の中で力強く助けてくださいるようにと願います。

四三年のエフェソ公会議では「神の御母」が教義として定められ、テオトールコスの称号が公式にマリアに対して与えられるようになりました。マリアは真の神・真の人であるキリストの母だからです。

何百年の間、教会は「イエズスの御母」「終生処女なる御母」「神の御母」という三つの称号を用いて御母マリアへの信仰を表明してきました。それはマリアの母性が託身の秘義と深いつながりのあることを示しています。これらは教義として確認されているのみならず、民衆信仰にも結び付き、キリストとはどういう御方かを理解するための助けとなっています。

(九五・九・十三)

## — 聴罪司祭と信徒のみなさん —

# 「告白の封印」は守られなければならない

### 聴罪という役務は神聖

(…) 聴罪の役務は神聖なものですから、単に神学上、法制上、心理学上の理由からのみならず、信者と神との親しい関係というその本質にふさわしい愛と敬意ゆえに、神聖さを保たねばなりません。罪のためにそむかれるのも神なら、罪をお赦しになるのも神です。「人の内にあるもの」すなわち個人の良心を見通し、寛大にも人間である司祭を癒しの協力者に取り立て、会話を聖化し、司祭が「キリストのペルソナにおいて」行動するという、言語に絶する特権をお与えになったのです。

主イエズス・キリストが「信者は教会の役務者に罪を言い表わすべきこと」とお定めになった時、同時に告白の内容についてはどんな状況であろうと誰に対しても、地上のいかなる権威に対しても、絶対に秘密を守るよう命じられたのです。現行の教会法の規定では、神に定められたこの権利・義務を、東方の

典札に従う教会では教会法典208条第1項1番と250条第1項で、ラテン典札に従う教会では教会法典983条と1388条で定めています。新教会法では刑法上のほぼ全域で違反者への処罰は軽くなっていますが、この件に関しては今でも一番重い処罰が科せられているのです。

司祭は、告白者の身元や罪の内容を言い表わすことを例外なしに禁じられています。特に大罪の場合、司祭はたとえ最も一般的な言い方であっても、口外することはできません。小罪に関しては、個々の行為そのものはもちろん、罪の種類を言い表わすこともできません。

しかし、人々の身元や罪の内容については沈黙を守るだけでは不十分です。いかなる事情と状況についても秘密を守り、沈黙を尊重しなければなりません。特にたとえ罪とは関係のないことであっても口外すれば告白者の心を乱しかねないこと、特に心痛を与える可能性がある場合

は他人にもらすべきではないのです。これに関連して、告白の封印を破ることだけでなく、告白によって得た知識を使用することを、告白者の負担になる場合は絶対に禁止されています。(DS2195「告白によって得た知識を悔悛者の不利益になるように使用することを絶対に禁止する。たとえ制限と説明を加えても、告白によって得た知識を使用してはならない。」「これは「直接または間接に罪をもらす危険がなく、悔悛者に不利益を与える危険がない時、そしてその知識を使用しないためにより大きな危険がある時には、告白によって得た知識を使うことができるか」という質問に対する教理省の回答です。)

罪およびここに述べたようなことに関する絶対的に必要な秘密厳守のために、司祭は第三者に口外することはおろか、告白者その人に対しても、本人のはっきりした許可がない限り(本人から頼まれたのでなければなおさら)、告白の内容を秘跡の場合(告白場)の外で口に出すことを禁じられています。

こうした完全な秘密性は直接に告白者の利益のためです。従って、告白した人が告白以外の場で自発的に、自分の告白の内容を明かしたとして

も、第三者に損害を与えなければ罪にはならず、教会法上罰せられることもありません。しかし少なくとも暗黙の了解として、公正の義務とでも言いましょうか、聴罪司祭に対する敬いの心から、告白者の側でも聴罪司祭が秘跡としての告白の中で相手の分別を信用して明かした事柄については口外してはならないことは明らかです。

### 不注意や軽率はいけません

(この点について、教理省はマスコミによる秘跡の冒流を防ぐための定め(AASSO (1985): 1367)を出しています。最近あった無分別な報道は許されるべきではありません。)(…)

司祭は、たとえ刑法に触れるほどひどくはなくても、この方面での不注意や軽率がスキヤンダルを引き起こし、信者を秘跡から遠ざけ、二千年にわたる教会と殉教者たちの栄光を曇らせてしまうという事実を考えねばなりません。

一方、告解の秘跡を受ける信者は、聴罪司祭を非難することは無防備の人間を攻撃するに等しいことを知るべきです。神の定めと教会の法は、事実上「血を流すまで」の完全な沈黙を司祭に要求しているからです。(…)

(九四・三・十二)